あかずきん.jp http://www.aka-zukin.jp/
こちらもご覧ください

ヒトパピローマウイルス

HPV ワクチンでできる、子宮頸がん予防 前編

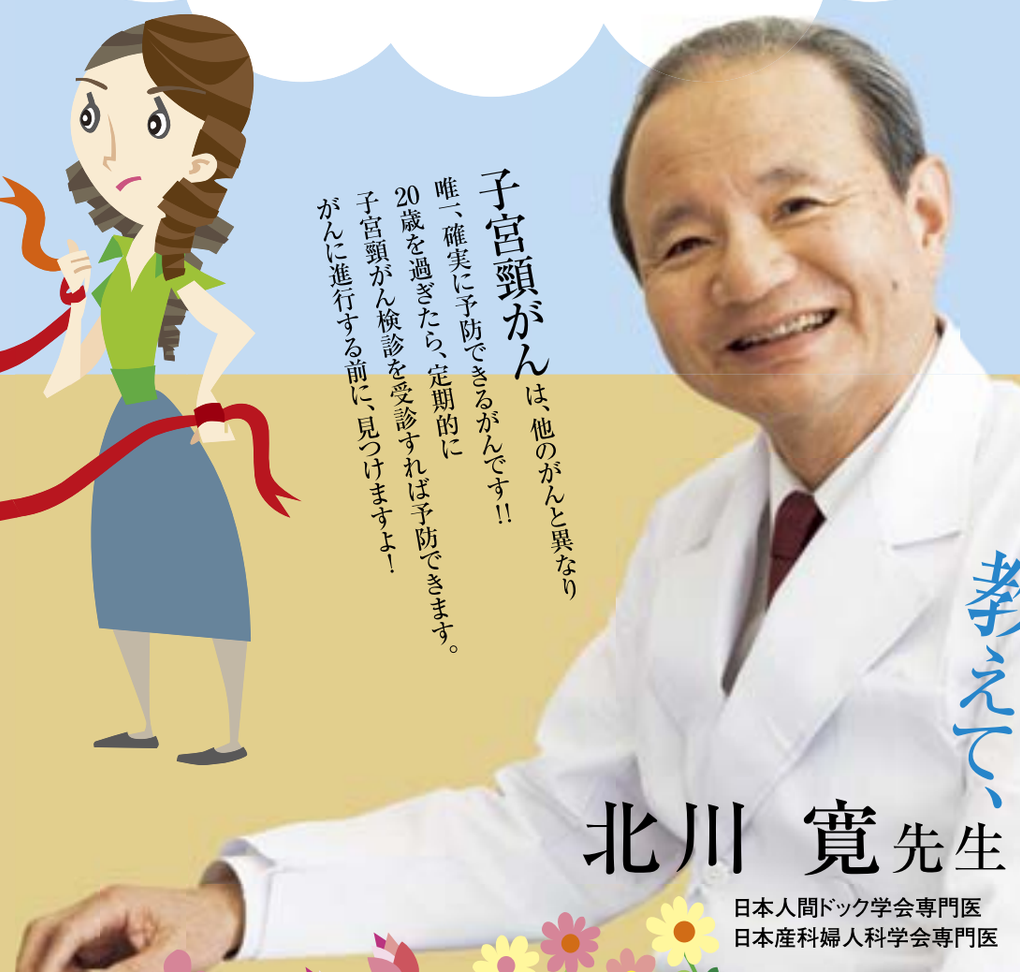
子宮頸がんの検診率は、全国平均で とても低い受診率です!! 20%

2010年4月から、HPVワクチンが、当会プラーカ健康増進センターで接種できます。
「でも、ワクチンのこと良く知らないし、ホントに予防できるの? 大丈夫なの?」と
不安を感じている女性も多くいらっしゃると思います。
そこで、女性の強い味方!! 北川寛先生になんでも聞いてみましょう。

ヒトパピローマウイルス HPV とは、どのようなウイルスなのでしょうか?

1. HPVは、性交渉によって感染する子宮頸がんの原因ウイルスです。
2. 性交経験がある女性のほとんどは、感染したことがあります。
3. 感染しても90%以上は自己の免疫力によって自然に消えます。
4. 一部の女性で感染が長期化した場合(持続感染)、前がん病変を経て、子宮頸がんになる可能性があります。

子宮頸がんは、他のがんと異なり唯一、確実に予防できるがんです!!
20歳を過ぎたら、定期的に子宮頸がん検診を受診すれば予防できます。
がんに進行する前に、見つけますよ!



教えて、北川 寛先生
日本人間ドック学会専門医
日本産科婦人科学会専門医

がんは、ワクチンで予防できる時代へ!
はじめてください、子宮頸がん予防

子宮頸がんは女性特有のがんで、子宮の入り口にできるがんです。(図1)

近年は、20代後半から40代前半の若い年齢層に急増し、発症のピークは35歳となっています。(グラフ1)

近年この子宮頸がんに対するワクチンが開発され、世界100カ国以上がワクチンを承認しています。日本では、昨年12月にワクチンが発売され、徐々に普及しています。

子宮頸がんは、日本では年間約15,000人が発症し、約3,500人の女性が亡くなっています。

子宮頸がんは、初期には自覚症状がほとんどなく、日本では検診の受診率が低いため、発見がしばしば遅れてしまい、がんが進行して不正出血や性交時の出血などで発見されることがあります。

しかし、子宮頸がんは原因やがんになる過程がほぼ解明されており、予防ができるがんなのです。

定期的に検診を受けることで、早期に、がんになる前に発見し、子宮を失わずに治療することが可能です。

なお、子宮にできるがんには、赤ちゃんが入っている子宮体部にできる「子宮体がん」もあります。(図1)

子宮体がんは、発症要因として遺伝やホルモン異常、未妊、未産、閉経、肥満、高血圧、糖尿病などが指摘されています。

子宮頸がんの原因は「高リスク型HPVウイルス」です

子宮頸がんは、HPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスの感染が原因で引き起こされる病気です。HPVは皮膚や粘膜の接触によって感染するごくありふれたウイルスで、イボなどをつくるローリスク型(6、11型など)とがんを発症させるハイリスク型(16、18型など)に分けられます。(表2)

日本人子宮頸がん患者の約70%からこの2種類のHPVが見つかっています。

子宮頸がんを発症させるHPVは性行為により感染し、多くの女性(約80%)が一生のうちに一度は感染する、ありふれたウイルスです。

子宮頸がんは多くの場合、発がん性HPVの持続的な感染や前がん病変の後に発症すると考えられています。

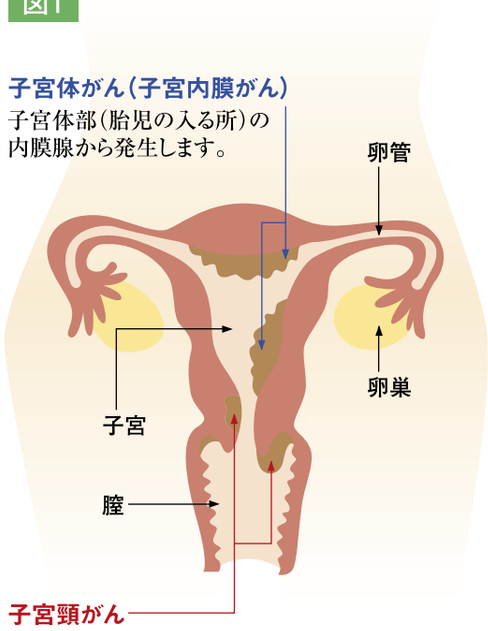
当会で子宮がん検診を受けていただくと、発がん性のあるハイリスク型HPVに感染しているかどうかを調べることができます。

「発がん性のHPV」に感染した場合の危険性

発がん性HPVに感染していても必ずしもがんになるわけではありません。

発がん性HPVに感染しても多くの場合、感染は一時的でウイルスは自然に排除されますが、感染した状態が長く続くと、数年から十数年かけて、前がん病変(がんになる前の異常な細胞)を経て、子宮頸がんを発症することがあります。(図2)

図1



グラフ1 日本人女性における子宮頸がん発症状況(2001年)

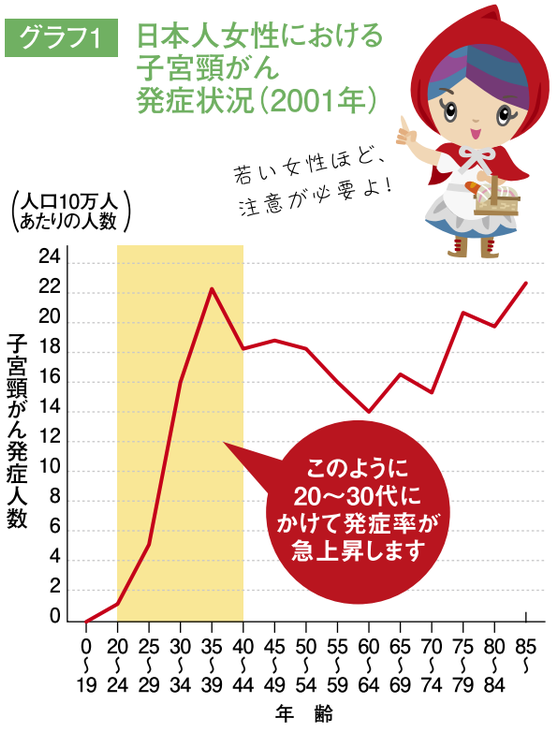
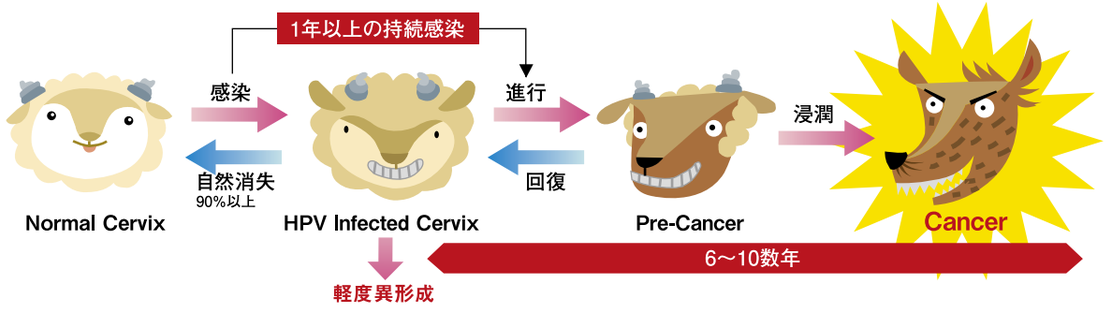


表2 高リスク型HPVと低リスク型HPV

HPVには100種類以上あり、その中のおよそ30種類が性器粘膜に感染

高リスク型HPV	16、18、31、33、35、39、45、51、52、56、58、59、68型	→ 子宮頸がん
低リスク型HPV	6、11、42、43、44型	→ 尖圭コンジローマ

図2 HPV感染と子宮頸がんの関係



子宮頸がんは、「検診とワクチン」で予防できるがんです

子宮頸がんから多く見つかるHPV16型、18型の2つのタイプの発がん性HPVの感染を防ぐワクチンが2009年（平成21年）12月に認可発売されました。

ワクチンの名前は『サーバリックス』といいます。このワクチンは、すべての発がん性HPVの感染を予防するのではなく、子宮頸がんを最も発症させる可能性のある、HPV16型、18型の感染を予防します。

しかし、100％子宮頸がんを予防できるわけではありませんので、子宮頸がん検査は定期的に受ける必要があります。

また、HPVワクチンが現在感染しているウイルスを排除したり、発症している子宮頸がんや前がん病変の進行を遅らせたり、治療したりはしません。

HPVワクチンの「予防効果」

今回のHPVワクチンは、子宮頸がんの70％は予防できます。さらに31、52型にも効果があるかも知れないので、そうなると約85％の子宮頸がんを予防できることになります。

HPVワクチンの対象者は、10歳以上の女性で、できればHPVに感染する前のワクチン接種が望ましいですが、一度感染しても、今後の再感染を防ぐために、成人女性へのワクチン接種も有効です。

10歳から45歳位までが対象ですが、それ以上の年齢でも、ご本人が希望されれば接種は可能です。（図3）

ワクチンの予防効果がどのくらい続くかについては、現在、確認されている期間は、約7年ですが、さらに接種後の経過観察が続けられています。推計によると20年位は、抗体価が続くとも言われており、予防効果はさらに延長する可能性があります。

HPVワクチン「接種方法」の注意点

HPVワクチンは3回接種します。注射部位は腕の筋肉にします。3回接種しないと、十分な予防効果が得られません。接種時期は初回接種の後、1ヵ月後と6ヵ月後の計3回になります。（図4）

当会では、ワクチン接種をする前に、ワクチンについて良く説明をして、健康状態をチェックしてから、接種します。未成年者に接種する場合は、保護者にも説明をして、同意をいただいてから接種をしています。

当会でも今年から、プラーカ健康増進センターで接種可能になりました。予約制になっています。料金は3回で約5万円ですが、3回に分けて、お支払いしていただけます。

図3 再感染を防ぐためにも、成人女性へのワクチン接種が有効です。

●発がん性HPVは、感染してもほとんどは自然に排除されますが、何度でも感染します。
●成人女性でも、ワクチンを接種することで、再感染を防ぐことができます。

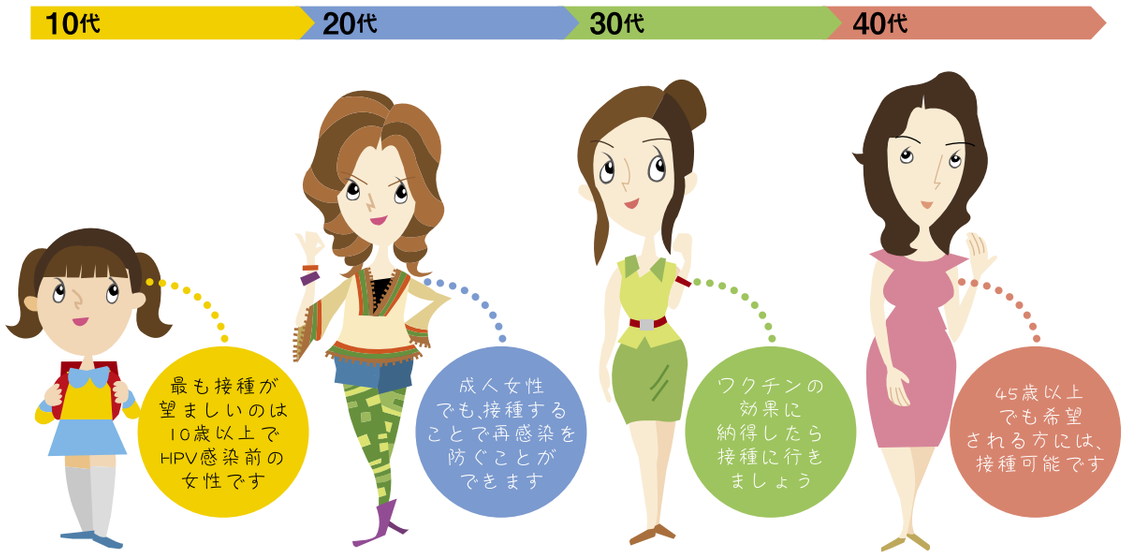
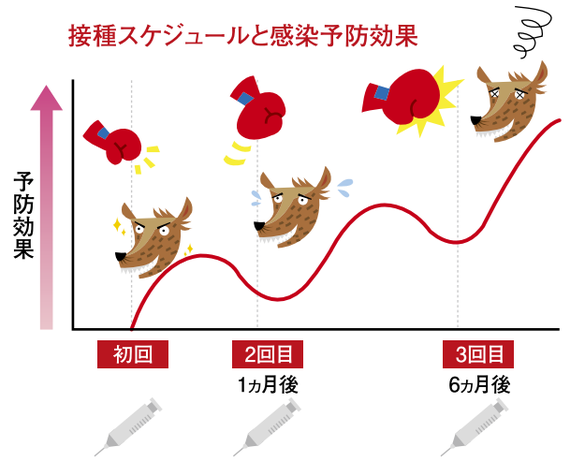


図4 予防ワクチンの効果を十分得るには、3回の接種が必要です。

●3回接種しないと十分な効果が得られません。
●3回の接種の途中で妊娠した場合には、接種は継続できません。
その後の接種は医師にご相談ください。